

不心得者からの遅ればせの感謝状

●フィールドとは何か？

大学で数量社会学的手法を用いて実証分析をやっている友人から「フィールドを持つている人がうらやましい」と言われたことがある。私はフィールドということをおあまりに当然視していた。

フィールドとは、実際の観察対象のある場所、観察者が対象のすぐ近くにいられる場所である。しかし、友人の発言にはさらに、研究者がそこにいることによって「元気」づけられる何かがある場所というニュアンスが含まれているように思われる。磁場のことを英語でマグネティック・フィールドといい、そこに入った鉄などの金属に影響を与える。ここで議論しているフィールドの場合、入って影響を受けるのは私（研究者）である。確かに、研究関心や動機において迫ってくるような何かをもたらしてくれるフィールドはありがたいものだ。

●先住民地区フィールドワーク馴れ初め

私は、メキシコの教育の研究を始めた時、さらにラテンアメリカ全体を広く見たいと思っていたので、先住民の教育というテーマに深入りする気はなかった。一九八一年から二年間、研究所からの長期派遣でメキシコに滞在した。受け入れ先であった第三世界経済社会研究所で、「農村地域に先生が根付かない問題」プロジェクトのオアハカ州調査に参加しないかと誘いを受けた。そのプロジェクトはチワワ州での調査を終えたところで、大勢で楽しそうにやっているなど見ていたので、軽い気持ちでOKした。ところが、オアハカへ出発の朝になって、そのために家に泊めてくれた友人のミゲルから、そのまま二人だけで調査を行うと説明された。思えば、予定として師範学校へ行くことしか聞いていなかったから話が違うわけでもなく、いずれにせよ今更いやだといえる状況ではなかった（実際のところはびつくりしたものいやでは

なかった。ミゲルは、リーダーと一緒にオアハカ州での予備調査も済ませていた。リーダーはレイモンド・ライオンズという元ユネスコの教育計画研究所の要職も務めた高齢のイギリス紳士で、農村のフィールドワークを繰り返すのは、もう限度だったのだろう。しかしプロジェクトを放り出すわけにはいかなかった。続きを一人任せられたミゲルも、またインタビューしても同じことしか出てこない、と義務を遂行するためにのみ行くことを今やあからさまにしていた。途中、車のオイルポンプが故障して、強盗に備えて交代で見張りをしながら道端に止めた車中で寝るといふハプニングもあった。師範学校へ着くと、スペイン語が怪しい私も分担して学生達にインタビューする、ということが始まった。

続いて、農村経験師範学校のあるミへ先住民地区に行くと言われた。先生が地域に根付かない問題はここでも深刻だったからだ。また二言語教育制度が正式にできたばかりの頃でそれ

についても、当然関心があったようだ。オアハカ市から一時間でミトラという幾何学模様で有名な遺跡の町があり、そこでポリタンクにガソリンを詰めて二時間半ほど砂利道を登ってドライブしていくと、ミへの中心のアユトラ村に着いた。先住民庁の現地調整センターのゲストハウスで宿泊し、いくつか学校を訪ね、先生達をインタビューした。

翌日ミゲルが、恋人とその家族が観光にやってくるのでオアハカ市の空港まで迎えに行く、と言って車で去った。残された私を、調整センターにいた小学校のスーパーバイザーと小学校寄宿舎責任者が、これから寄宿制小学校にスーパーバイザーに行くからついて来ないか、と誘ってきた。一泊の予定だといふ。ジープで一時間、さらに歩いて二時間、テプステペック村のジャーノ・クルセーロという峠にある学校に着いた。夜になると、スーパーバイザーが先生達を相手に会議が始まった。寒さと疲れでもうれつな眠気が襲

い、午前二時ごろ、途中で宿舍のベッドに退散したが、記憶に残った議題は、先生達の労働条件のことであった。スーパーバイザーが転勤希望申請資格の説明をした後、時間をかけたやりとりがあり、先生達の強い関心事がそこにあることがわかった。まさに、農村に先生が根付かない問題である。ここへの途中で調査した師範学校の学生達は、異口同音に農村の人々にくくしたいと答えていた。が、僻地勤務の厳しさを知ってしまえば、あるいは一度職を得てしまえば、より快適な勤務地を求め、あるいは他地の同僚と平等な待遇を求めるようになるのは当然だろう。翌日、スーパーバイザーはさらに他の小学校のスーパーバイズを続けるため、一人で峠の向こうに発つて行ったが、寄宿舎責任者と私は来た道を引き返してアユートラ村に戻った。

●「深い」フィールドへ

私にとって非常に幸運だったのは、ミゲルがここ、ミヘ民族地区に私を置き去りにしていつてくれたことだ。彼の言語能力、プロジェクトとの関わり、予備調査に来ていて人間関係ができていたことなどを思えば、彼が

いる限り当然彼が調査のイニシアチブをとっただろう。もしかしたら寄宿制小学校訪問も予定外だからと行くこともできなかったかもしれない。ところが、彼の不在の数日間、私はミヘの人々と直接向き合うことができ、ミヘの人々も私の相手をしてくれた。私は自分が抱いた疑問をじっくりと質問し、またそれでも解決できない疑問を自分の疑問として抱え続けることとなるだけの「深さ」のある機会を得たのだ。言い換えれば、巧まずして——そしてその時はまだその自覚はなかったが——これも私の重要なフィールドとなったのだ。

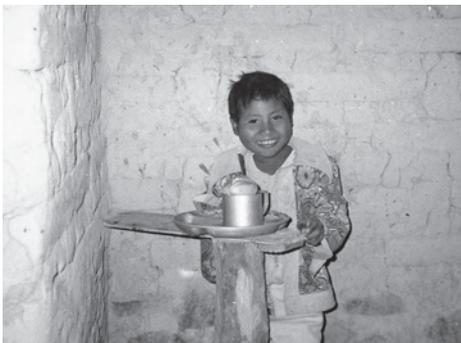
この時の経験は、一九八三年に帰国してその三年後に出版された拙著『メキシコの教育発展：近代化への挑戦と苦悩』（アジア経済研究所）で書いた。しかし、あの時の疑問は基本的に未解決のままだった。何故、スーパーバイザーが来た時の中心議題が労働条件、労働者の権利となるのか、何故先住民教育制度の先生達が「二重言語・文化教師資格」から「二重言語・文化」を外してほしいと要求していたのか、先生達の教育歴認定を巡る要求はどのような経緯で生じ

たのか、先住民をスペイン語化するのではなく先住民語とスペイン語の両方の能力を身につけさせるという建前の先住民教育システムの中に、何故スペイン語化センターと称する初等前段階の学校があるのか。

一九八〇年代はアジア経済研究所でも現地調査の機会に限られていた。一九九一年に一〇年ぶりにミヘを今度は最初から一人で訪れた時以来、ミヘは私のフィールドとして意識されるものとなり、メキシコの先住民教育は私の研究領域となった。このフィールドは私を二つの方向に向かわせることとなった。第一は、歴史的な研究である。先住民教育制度の成立はもちろんのこと、先の先生達の勤務条件に関する強い要求の問題を根本において理解するには、そうした方向性が必要、有効であることがわかってきた。第二は、眼前の村の変化とメキシコ全体との関わりについての、教育という観点からの社会学的研究である。

普通、フィールドワークとは、例えば調査票を用意してインタビュー等を通じて現地でそれを埋めていく作業を指し、また、フィールドワークに基づく成果

とえば、そのようなフィールドワークの結果を直接利用した論文等を指す。そうしたものも書いてきたが、私にとってミヘは、革命期まで遡る一方、同時に一九九四年のサパティスタの武装蜂起、二〇〇六年のオアハカ州の政治紛争、といったメキシコ社会全体の諸事件の意味を、村レベルで理解するための努力を促す刺激に満ちた存在となってきた。考えてみればメキシコは、ぼんやりと時間を過ごしがちな不心得者の研究者に対しても、迫力を持って迫ってくる劇的な大フィールドだ。そこにマイフィールドを持つことに、日本の友人が羨望の念を抱くのは当然のことであった。ありがとう、ミヘ、メキシコの人達、そしてミゲル。



うれしい給食 (1981年、テプステペック、ジャーノ・クルセーロ寄宿制小学校食堂で筆者撮影)